感動詞の共起について

姚 瑤

1. 問題提起

(1) 「あらまあ、それは大変ですね。」

(2) 「鈴木さん、これを田中さんに渡してください。」「あ、はい、かしこまりました。」

例(1)、例(2)のように、複数の感動詞の連発が日常会話の中頻繁に見られる。このような感動詞の共起は何らかのルールに従っており、その順序を変えると不自然になることがある。例えば、例(1)の「あら」と「まあ」を逆にすると、「まあ」で一旦ある情報を受け入れたことを示した後、またその情報を新情報扱いして「あら」で驚きを示すことになり、矛盾が生じるわけである。例(2)も同様である。「はい」が先行して相手の要求に応じた後、「あ」で改めてその発話に注意を向けたことを示すことはどうも不自然になる。

このように、感動詞の共起順は人間の認知プロセスの順序性にある程度対応していると考えられる。しかし、その対応はどこまで言えるか。この問題を解明するためには、まず①どのような感動詞同士が共起しやすいか、②共起可能の場合その順序性にどのような制限があるかといった質問に答えなければならない。したがって、本論文では異なる感動詞の共起可否および共起可能の場合の制限に対する考察を通し、感動詞の共起順序に影響する要因の解明を試みる。

2. 先行研究と問題点

感動詞の共起に関する研究として、森山(2015)、森山(2022)、劉・有元(2022)が挙げられる。

森山(2015)では、新情報の導入を示す応答において、「情報の導入に関わる認知的なプロセスの表示が考えられる」と述べた上、「これらの応答は選択的な関係ではない。それぞれの機構として情報の導入を表す点で、共起することが一応可能である。いささか極端であるが、

(42) 「あ、そう。本当。へええ、なるほど、わかった。」

のような共起も不可能ではない。ただし、順序性にはそれぞれの意味に応じた傾向のようなものが考えられる。」と、新情報導入の応答における共起の順序性について言及した。

そして森山(2022)では新情報に対する応答を初期反応部、導入部、チェック部、コメント部

という四つのスロット（選択枠）（表1）に整理し、「仮に応答表現が共起して応答表現全体を構成していく場合、ほぼこうした順序性が考えられる」という見解を示している。しかし、この研究は新情報導入の応答のみに焦点が当てられ、また実証的な調査が行われていないという点で不十分である。

表1 森山（2022：44）

表1：新情報遭遇の応答表現のスロット（選択枠）

初期反応部	導入部	チェック部	コメント部
あ	ふうん	そう（か）	すごい
お	へー	うそ	ひどい
え	えー	本当	やべー
驚き系感嘆詞 （うわ等）	おー ああ等	なるほど 等	やった 等

劉・有元（2022）では「あ、そー」のような連続している異なる形式の感動詞類を「二連鎖感動詞類」と称し、それを構成する感動詞類をアクセス（A群）、真偽の検討（B群）、中途半端な判断（C群）、真偽判断の確定（D群）という四つの認知プロセスに分けている。二連鎖感動詞類は「A群→B群→C群→D群」という統語的な順序が決まっていると述べた上、「アクセス（A群）→真偽の検討（B群）→真偽判断（C→D群）」という真偽判断に関する認知ユニットが存在すると仮説を立てた。このような認知ユニットは「え？」、「いや」などリセット感動詞類と呼ばれるものによって中断することがあるとも指摘している。しかし、扱ったデータ量が不十分である一方、いかなる判断基準で1認知ユニットが完了するか、上述の統語的順序とは異なり、「あ、そう、うーん、でも、そっか」のような感動詞の共起はどう説明すればよいかなど、不明な点が多く残っており、検討の余地があると思われる。

また、上述の研究はすべて新情報に対する反応のプロセスや真偽判断の認知プロセスという人間の心的操作の観点から感動詞の共起順について論じたものである。こうした認知の観点からの研究はもちろん重要かつ不可欠であるが、感動詞の共起可否あるいは共起順には別の影響要因が考えられるか、従来の感動詞の機能分類では説明できるところがあるか、本稿ではこういった問いを解くことを目指す。

3. 研究対象及び調査方法

研究方法は主に日本語日常会話コーパス（以下CEJC）⁽¹⁾を利用し、語彙素が異なる感動詞の共起が見られる例を抽出し、各感動詞間の共起順、共起の頻度を統計する。

具体的な手順は、CEJCで品詞一大分類—感動詞、後方共起：キーから1語、品詞一大分類—

感動詞の共起について

感動詞で検索した。検索結果の中、

- ① 前後項の語彙素が相同のものを除外する⁽²⁾。
- ② CEJC モニター版の語彙素分類では、「あっ」、「ああ」、「あー」は異なる語彙素として分類されている。「あっ、あー」、「あっ、ああ」といった共起が多く観察された。しかし、これらの同音感動詞はプロトタイプ的な意味・機能が異なる一方、類似する部分もあり、連続性が見られる（姚2021）を参照）。こういった感動詞の共起を含めた包括的な研究は精緻な音声学的観察が必要と考えられる。このほか、「うー」、「うん」、「うう」、「ん」、「んー」や「おっ」、「おお」、「おー」も同じく、その共起順は音声的調整による微妙な意味機能の違いと緊密に関連しているため、これに関する検討は今後の課題とし、本稿では考察対象としない。
- ③ 「おほほ、おほほほほ」のような笑い声、「ぶう、はあ」のような呼吸音、「えへ、えへん」のような咳払いといった生理音を除外する。
- ④ 「ラッスン」+「ゴレライ」や「おーら」+「よっと」のような実際一語であるものを除外する。
- ⑤ 「あ、こんにちは、おっ、こんにちは」のように一人の発話者が二人の対話を再現する例を除く。
- ⑥ 「おおい、おい」、「よいっしょ、いっしょ」のように前項の一部反復と考えられるものを除外する。

以上の調査手順を経て、1510件の感動詞の共起が見られた。次章では、具体的に調査結果の分析・考察を行う。

4. 全体調査結果

4.1. 調査結果と感動詞分類

1510件の感動詞の共起の中、前項として出現している感動詞が41語で、後項として出現している感動詞が47語である。共起する前後項の関係を分析するため、まずはこれらの感動詞を機能別に分類した。分類の基準は主に田窪・金水（1997）、森山・張（2002）を参照している。田窪・金水（1997）では感動詞、応答詞を「外部からの言語的・非言語的入力があったときの話し手の内部的の情報処理状態の現れ」として捉えた上、これらの詞類を入出力制御系と言い淀み系に分

-
- (1) 国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」で構築中の200時間規模の日常会話を収めたコーパスである。その特徴は、
 - ① 日常場面の中で当事者たち自身の動機や目的によって自然に生じる会話を対象とする
 - ② 多様な場面の会話をバランスよく集める
 - ③ 音声だけでなく映像まで含めて収録・公開の3点が挙げられている。
 - (2) 語彙素分類はCEJCの分類に従う。

けている。

A 入出力制御系

応答1：ああ、はい、はあ、ええ、うん、ふん（下降イントネーション）

応答2：いいえ、いえ、いいや、いや、いやいや

意外・驚き1：は、はあ、え、ええ、へえ、ふん（上昇イントネーション）、えっ、はっ、ふんっ

意外・驚き2：あれ、あら、おや

意外・驚き3：おお、わあ、おっ、わっ

発見・思い出し：あ、あっ、はっ

気付かせ・思い出させ：ほら、そら、それ

評価中：ふうん、へえ、ほお（緩やかな上昇または高平調）

迷い：ううん（平坦または緩やかな下降）

嘆息：あ（／は）あ、お（／ほ）お、う（／ふ）うん（緩やかな下降）

B 言い淀み系

非語彙的形式：え、ええ、単語末母音の長音化

語彙的形式：

内容計算：ええ（っ）と、ううんと

形式検索：あの（一）、その（一）、この（一）

評価：ま（あ）、なんというか、なんか、やっぱり

（p 263、p 273）

また、森山・張（2002）では、感動詞を対他的感動詞類と非対他的感動詞類に二分した上、対他的感動詞類を対人関係調整系、呼びかけ系、応答詞系、非対他的感動詞を広義情動変動系、広義思考中表示系、動作実行連動系に分類している。

本調査では、上述の分類法を参考し、今回の調査に出現している感動詞を機能別に①気づき、②意外・驚き、③肯定応答、④否定応答、⑤非語彙的言い淀み、⑥語彙的言い淀み、⑦気づかせ・思い出せ、⑧評価中、⑨価値評価、⑩かけ声、⑪挨拶語の11種類に分けた。また、これらの感動詞類が共起している場合、その共起順に従って前項のみ、後項のみ、前後項とも出現という三つのタイプに分類した。分類の結果は以下の通りである⁽³⁾。

A 前項のみ（12語）

意外・驚き：ひい、あら、うわ

肯定応答：あん、ううん、ええ、なあ、ほう

(3) 便宜上、下記分類の感動詞表記はCEJCの語彙素表記に従う。

非語彙的言い淀み：あー

語彙的言い淀み：と

気付かせ・思い出させ：おら、やれ

B 後項のみ (18語)

意外・驚き：んあー LLH

肯定応答：ふ、あい、はん

否定応答：いいえ

非語彙的言い淀み：いー

語彙的言い淀み：っと、まあ

気付かせ・思い出させ：おい、こら

価値評価：なんちゃって、やった、よし

かけ声：よいしょ、よっ、よっこいしょ

挨拶語：御早う、さようなら

C 前後項とも出現 (29語)

気づき：あっ

意外・驚き：えっ、あれ、おっ

肯定応答：うん、ああ、はい、ん、うう、おお、はあ、ふん、ふう

否定応答：いえ、いや

非語彙的言い淀み：えー、んー、うー、おー

気付かせ・思い出させ：ほら、ほれ、やあ

評価中：へえ

語彙的言い淀み：えーと、うんと、あの、その

挨拶語：有り難う、今日は

4.2. 各感動詞類の共起関係

表2は4.1節の感動詞分類に基づき、各感動詞が前・後項としての出現頻度を統合したものである。表2を観察すると、言い淀み系の感動詞が前・後項とも出現頻度をもっとも高く、非語彙的言い淀み系と語彙的言い淀み系を合わせて前項が1064件、全体の70%を占めている。後項が883件で全体の58%である。これは、言い淀み系の感動詞は思考中の合図であり、我々は常に考えながら発話行為を行っているため、発話のはじめ、途中、終わり、いずれの場所にも言い淀み系の感動詞が出現可能である。また、対他的な発話場面において、実際思考行為が行われている

表2 各感動詞類の前・後項出現頻度

前項 \ 後項	気づき	意外・驚き	肯定 応答	否定 応答	非語彙 的言い 淀み	語彙的 言い淀 み	評価中	気づかせ・思 い出せ	価値 評価	かけ声	挨拶語	合計
気づき	0	1	7	6	3	11	0	1	1	0	3	33
意外・驚き	5	1	7	3	0	37	8	0	0	0	1	62
肯定応答	4	4	100	4	2	33	1	6	1	1	6	162
否定応答	2	0	2	1	3	17	0	0	0	0	0	25
非語彙的言い淀み	10	5	19	9	19	120	1	4	0	2	1	190
語彙的言い淀み	49	16	100	17	176	308	0	200	1	1	6	874
評価中	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
気づかせ・思い出せ	3	0	1	0	5	148	0	3	0	0	0	160
挨拶語	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2
合計	73	28	237	40	208	675	10	214	3	4	18	1510

か否かに関わらず、場つなぎ的な表現としても多用される。それゆえ、表2にも示しているように、ほぼ全種類の感動詞と共起できる。

また、気づきの「あっ」と意外・驚きの感動詞は情報に遭遇した場合の最も一次的な反応を示すもので、情報処理プロセスの最初段階に存在するため、他感動詞と共起する際、基本的に前項に位置することが多いと推定されるが、今回の調査では応答詞、気づかせ・思い出せ類の感動詞との共起も数例見られた。例(3)がその一例である。話し手が「ほら」で自分の発話に対して相手の注意を喚起した後、自分の言い間違いに気づき、「あ」でその反応を示している。このように「あっ」は発話の先頭だけではなく、発話途中に何かの新しい情報に気づいた場合にも使われ、よって他感動詞の後部に出現することも可能である。

(3) IC02_由里子：チャージ機があるから

IC01_岡崎：うんじゃ買う前にそこに入れりゃいいのね

IC02_由里子：そう

IC01_岡崎：いくらか少し余分めに入れときゃいいのね、わかった。さ、なんだっけ、
自動でほら、あ、自分で計算がセルフ、セルフチェ

IC01_岡崎：セルフレジ

T017_017⁽⁴⁾

(4) CEJC から引用した例文は、文頭に話者ラベル (cf: IC01_ 島村)、文末に会話 ID (cf: K004_008) で示す。符号、下線は読みやすいため筆者が適宜付け加えたものである。

感動詞の共起について

同類共起について、言い淀み系の同類共起のほか、肯定応答詞同士の共起も100例が目立っている。その中、「ん、ああ」「ふん、うん」のように相手の発話に対して納得したことを示すあいづちの共起がほとんどである。それに対し、否定応答詞の共起は「いえ、いや」の一例しかなかった。肯定応答と否定応答の共起も数少ないが、「肯定応答、否定応答」4例、「否定応答、肯定応答」2例が見られた。例(4)は「否定応答、肯定応答」の一例である。話者が「ん」でまず相手の発話を受け入れた後、その発話に対して「小学生もそうだよ」という反論を提出しようとし、「いやー」を発したのである。つまり、「ん」は相手の発話に対する肯定を示しているわけではなく、単にその発話を聞いているかつ理解できたことを相手に伝えている。当然、実際のコミュニケーションにおいて真偽判断が要求される場合でも、「はい、いいえ」のように肯定判断を下した直後、何らかの原因で自分の判断を覆す返答も一見矛盾しているものの十分に考えられる。このように、肯定応答と否定応答の共起も不可能ではない。

- (4) IC01_堂島：最近は女子学生のほうがいろんな発言をしたりするじゃないっすか
IC04_久米田：うんうんでもこれはやっぱり年齢の問題もあるから、男がおとなしくなったわけじゃないんですけど。大体二十歳前後だったらやっぱり女のほうが元気ですし。真面目ですから、いろんなこと言いますけど
IC01_堂島：ん、いやー
IC04_久米田：男の子どうしてもあの
IC01_堂島：小学生でもそうだよ
IC04_久米田：そうですよね
IC01_堂島：うーん、女の子のほうが
IC02_青島：あ、ジョ、いやー女性のほうが完成度は早いんだよ
IC04_久米田：うん

T024_010

そのほか、かけ声は対聞き手的ではないため、会話コーパスでの出現頻度が元来少ない一方、情報処理に関わる感動詞類と比べ、独立して出現する 경우가ほとんどで、他感動詞とは共起しにくいのである。また、気づかせ・思い出せ類は対聞き手的感動詞であるものの、語彙的言い淀み系との共起が前項として148例、後項として120例で多い数を見せる一方、そのほかの感動詞類との共起はあまり見られなかった。

さらに、3例しかなかったが、価値評価の感動詞が後項としてのみ出現し、それぞれ気づき類、肯定応答類、語彙的言い淀み類の後ろに出現していることは、情報遭遇→情報処理→情報受容→情報判断、評価という認知のプロセスに合致している。

5. 感動詞の共起とその影響要因

本章では、今回の調査において特に共起特徴が顕著な感動詞や出現頻度の高い感動詞を取り上げ、統計結果の分析及び実際の使用状況に基づき、具体的に感動詞の共起関係を検討し、その共起可否及び共起順に影響を与える要因について論じる。

5.1. 共起順固定関係の感動詞類

5.1.1 「あらまあ」(25例、逆0例)

(5) IC02_春枝：もうちょっとお湯を足してくれる？

IC01_船戸：えっ、濃かった？

IC02_春枝：うん

IC01_船戸：あらまHLL、そう、そんな濃くなかったでしょ

T021_016

今回の調査においては、例(5)のような「あら」と「まあ」の共起が25例あった。「あの、えーと」のような共起とは異なり、「あらまあ」の間に読点をつけない理由は、すべての例文に出現している「あら」+「まあ」の共起では、間にポーズが聞こえず、アクセント核も一つしかなく、HLLLあるいはHLLの下降調で発音されている。意味的にも「あらまあ」全体で軽い驚きの表現として捉えられ、一語化がかなり進んでいると思われる。

富樫(2002)では、「まあ」の本質的機能を「処理過程の曖昧性を標示する」とし、「聞き手への働き」は派生的なものであり、女性的な驚き表現として用いられる「まあ(あら、まあ)」も同様に語用論的フィードバックからの派生であると述べている。それは「驚き」はいわゆる新規情報の獲得であり、そこに「まあ」が現れるのは、獲得情報に対する何らかの「曖昧性」つまり「はっきりとした事実として受け止めない」のような反応が派生的に生じているからだと解釈している。

これと関連して、本調査で「まああら」のような倒置が一例も出現せず、実際の発話を考えても想定しにくい原因は、下降調の「あら」は知覚した情報が自分の既知情報と不整合であることに対して意外・驚きの感情を示す。それに「まあ」が後続することは、少し予想外ではあるが、それほど受け入れがたい情報でもないため、曖昧な肯定評価を下したのである。つまり、「あらまあ」の共起順は知覚情報の既知情報データベースとの不照合による驚きからその情報に対して評価を下すという情報処理のプロセスと一致しており、このプロセスに逆らうことができないのである。

「あらまあ」と似た表現として、例(6)に示すような「あれまあ」も7例出現しており、い

ずれも連続した下降調で倒置する例はなかった。つまり「あらまあ」と同じく、情報処理のプロセスと照合し、一語化が自然に進んでいると考えられる。

- (6) IC03_ 鞠江 もう八十なの
 IC05_ 祖母 そうだよ八十一、二んなんだよ
 IC03_ 鞠江 えー、あれまー HLLL、
 IC01_ 雪江 早いね

K013_003

このように、「あら」+「まあ」、「あれ」+「まあ」の共起順は人間の心的処理の順序に制限され、基本的に固定していると言える。

5.2. 位置自由型の感動詞類

5.2.1. 「あの、～」と「～あの」

本調査において、一番出現頻度が高い感動詞は「あの」で、前、後項としての出現回数はそれぞれ前項601回、後項358回（前項：後項≒1：0.6）に至った。定延・田窪（1995）によれば、「あの（一）」は話し手が言語編集という、聞き手の存在を予定する心的操作を行っている際に用いられる。この心的操作は具体的には、名前の検索と、適切な表現の検討に二分される。」すなわち、話題としたいもの、情報内容がすでに顕在化に成功しており、「あの」はそのものの名称なり、情報の述べ方なりをうまく表出しようとする心的操作を意味している。CEJC モニター版は日常場面の中で生じた自然会話を対象とするため、講演、発表などすでに原稿が用意されている形式とは異なり、話し手が話す際、その場その場で聞き手に伝えようとする情報を心的データベースから検索し、あるいはその情報を適切に表現しようと常に努力している。それゆえ、「あの」の出現頻度が高いことも当然想定しやすい。

5.2.1.1. 「あの」と「ほら」

今回の調査では、多くの感動詞と「あの」の共起が観察された。その中、特に気づかせ・思い出せ用法の「ほら」との共起は用例が多く、「あの、ほら」が168件、「ほら、あの」が136件も検索できた。このほか、同じく言い淀み系の「えーと」、「その」、「えー」、「んー」、「うー」、「おー」、「うんと」、発見・思い出しの「あっ」、そして肯定応答の「ああ」、「はい」、否定応答の「いや」との共起も10回以上あった。

- (7) IC01_ 島村：なんかさ三学年委員会やってたから
 IC05_ すみれ：あっ、あー、あー

IC01_ 島村：あの、ほら、三学年茶話会ってゆってちょっと先生たちをま軽くおもてなし、別にあの、お茶と簡単なお菓子の集いだけでいいのよ

K004_008

(8) IC05_ 哲也：だからあの北海道とかまあ行ったほうがいいですよ

IC03_ 昌美：うん、行きたい

IC05_ 哲也：なんでも①あのほら、そちらに②ほら、あの、おあにいさまがいらっしゃんだから、おあにいさまと一緒に回ってほしいじゃん

K005_019b

例(7)では、話し手は自分が三学年委員会をやっていたという情報を聞き手に提示した上、「あの」で「だから茶話会で先生たちをもてなしたい」という考えの表現形式を整えてから、「ほら」で相手の注意を喚起し、自分の気持ちを聞き手に共感させようとしている。例(8)の②では例(7)と逆で、まず「ほら」で相手の注意を発話の場に向けさせてから話し手と聞き手がともに知っている「ある人物が北海道にいる」という知識を活性化させ、その次に「あの」でその人物の名前の検索を行ったわけである。

例(8)の①、②が示すのに、「あの」と「ほら」が共起する場合、基本的に共起順に関する制限がなく、自由に順番を交換することができる。それは、両方とも聞き手の存在を前提とするが、「あの」は聞き手に伝える情報内容に対する心的処理に位置するが、「ほら」は聞き手への注意喚起という伝達機能を中心とする対聞き手の表現であり、情報内容に関する処理とはかかわらない。そのため、両者の共起順は情報処理の時間順に左右されず、かなり自由である。

5.2.1.2. 「あの」と言い淀み系の共起

「あの」と言い淀み系同士の共起も数多く見られた。10回以上出現したものとしては「あの、えーと」(87件、逆32件)、「あの、その」(71件、逆54件)、「あの、えー」(48件、逆24件)、「あの、んー」(46件、逆28件)が挙げられる。ここでは「あの」と「えーと」の共起を例として論じる。

定延・田窪(1995)では、言語編集の「あの」と異なり、「ええと」は話し手がいったん談話中に必要な検索や計算などのための予備的な心的操作に入っていることを表し、「ええと」を発話することによって、話し手はこの演算領域確保操作を通じて、目的となっている当該の検索・計算操作を明確化でき、支援できると、「ええと」の基本的な機能について説明している。要するに、「ええと」は話し手が談話に必要な情報検索・計算を行っていることの標識である。例(9)と例(10)はそれぞれ「あの、えーと」と「えーと、あの」の共起の一例である。

心的検索の段階が異なるものの、情報自体の検索が完了してから情報の名前を想起する流れと、

感動詞の共起について

もの名前がまず前景化され、その後に関する具体的な内容が思い浮かぶ流れと、両方とも自然に思われる。例(9)ではすでに討論する議題が決められ、それを全体的にどう言語化するかを考える過程は「あの」で、議題の詳細内容に関する心的処理は「えーと」で担っている。また例(10)では、情報を聞き手に伝えようとする途端、「あの」で「大規模コーパスかなんか」というユーチューブの名前を話し手が思い出す操作を行ったことを示している。このように、「あの」と「えーと」の使用順には厳密な制限がないと思われる。ただし、ここで注目したいのは、「えーと」だけでなく、「その」、「えー」、「んー」も同じく、「あの」と共起する場合、「あの」が前項に位置する例が後項の約二倍で圧倒的に多い。これは、「あの」が情報全体の発話形式を検索する心的操作に対応し、発話のはじめに位置することがより一般的であるためだと考えられる。「あの」以外、「その、んー」(17件、逆5件)、「えーと、えー」(12件、逆7件)などの言い淀み系の感動詞同士の共起も見られたが、いずれも可逆だった。つまり、言い淀み系の感動詞に関しては、同類の共起が多く行われ、共起順の制限はほとんどない。

- (9) IC01_松川：じゃ次のあの議題ですけれども、今度はあの、えーと、時代研究所の本ホームページメインサイトのリニューアルとゆうことで、えー、それに向けての準備の検討について…

W001_003d

- (10) IC05_松川：戸沢、スー先生のユーチューブ以外にほかに何かありそうかなってうのちょっと見てみたところ、杉崎先生がえーと、あの、大規模コーパスかなんかのあの講習会のユーチューブかな

IC10_末松：うん

W001_004

5.2.1.3. 「あの、あっ」(37件、逆6件)

第4章でも少し言及したように、一般的に言えば、新情報に対するもっとも未分化的な反応として、「あっ」は文頭に出現することが普通であるが、今回の調査では、「あの、あっ」の共起が37件観察された。例(11)では「あの」が話し手が東スポに載っていた内容について適切な表現形式を考えていることを示している。発話する途中、解散ではなく引退であるという自分の言い間違いに気づき、「あ」を発したのである。例(12)では「あ」が「あ、こいつのタッチがいいな」という引用節の内部に位置し、予想外な情報に対する軽い驚きとして使われているが、「あの」はその外部に位置し、発話全体の述べ方を考慮していることを表出している。この場合、「あの」と「あ」が共起するというより、「あの」は情報全体の表現形式の検索に関わり、情報内容としていかなる感動詞が連続して出現することも十分あり得る。

- (11) IC03_恒也：あのさ、金村キンタローのさ、レッスルワンの試合の時のさ、なんかちよつとしたこの衰えっぷりとさ

IC01_彩香：はい

IC03_恒也：きのうおとついでぐらいの東スポのに載ってたあの解散のあの、あ、

IC01_彩香：うんうんうん

IC03_恒也：引退のあれのさ、写真のナ、なんかさこうおじいちゃんぷりってさ、

IC01_彩香：はい

IC03_恒也：あれは何、やっぱりこう体を酷使し続けてきたあれの後遺症があるの

T008_010

- (12) IC02_大場：だからなんてゆうの、もっとさ、かっこいいかそうでないかの基準だけでいいと思うんだよ、

IC01_徹：うーん

IC02_大場：タあ、何々を綺麗に弾けますとかってゆうのって、それこそ基準があるわけ

IC01_徹：うん

IC02_大場：あの、あ、こいつのタッチがいいなとか、その、なんてゆうの、歌い方が、あー、あの、ここがこうなってこうなってて、あー、いいですねみたいな

T010_004

5.2.2. まとめ

以上のように、本節では、出現頻度のもっとも高い「あの」について分析を行った。その結果、「あの」を代表とする言い淀み系の感動詞は、気づかせ・思い出せの感動詞、同類の言い淀み系の感動詞、気づきの感動詞、意外・驚きの感動詞、応答詞などの多様な感動詞類と共起可能であるだけでなく、共起する際に共起順に関する制限もほとんどないことが分かった。その原因として考えられるのは、我々が常に思考しながら発話行為を行うため、情報処理が完了しない以上、文のいずれの位置に、言い淀み系の感動詞が出現して検索、演算、編集などの作業の進行を表すことも可能である。

5.3. 共起しやすい感動詞類

5.3.1. 「うん」系と「ふん」系の共起

本調査において、あいづちの表現として「うん」系と「ふん」系感動詞の共起がしばしば見られた。具体的には「うん、ふん」(21例)、「ん、ふん」(10例)、そして「ん、ふ」、「ん、ふふ」、「うん、ふん」がそれぞれ一例観察された。そのほか、共起ではないが、一語として「んふ」とい

う語彙素の用例も38件あった。

(13) IC02_ 一色：で次の一週間も次の人が始まってってゆう感じだなと思ってて

IC01_ 白石：うん、ふん

IC02_ 一色：次の人はねそんなに最初から二人でもできるかなと思うんだけど

IC01_ 白石：うんうーん

W007_002

例(13)に示すように、発話者は「うん、ふん」で相手の発話内容を聞き取ったことを相手に伝えている。いわゆるあいづちである。ここで注意すべきことは、「うん、ふん」の意味は単に相手の発話内容を受け止めたことを示すことで、必ずしもその内容に対する肯定に至っていない。力強く発音される肯定的判断を示す「はい」、「うん」と比べ、「うん」系+「ふん」系の共起は大体軽く発音され、また改まった場合や目上に対する応答の際にはあまり使われない。

共起順に関しては、「うん」系が後項の8例より、「ふん」系が後項に現れる例のほうが明らかに多い。類似の表現として「ああはあ」「おほ」なども挙げられ、いずれも「母音、始まり部分の母音の無声化(H化)⁽⁵⁾」という順番の組み合わせがより一般的である。その用法もはっきりとした肯定ではなく、単に相手の発話を受け入れたことだけを示す信号として機能している。このような「母音、母音H化」の共起順の定着は発音の便利を図るものと想定しやすく、感動詞の共起はその音韻とも関連すると言える。

さらに、「うん、ふん」は中国語の「嗯哼」、英語の「uh-huh」と音声上、機能上においてかなり類似点がある。中国語の「嗯哼」も英語の「uh-huh」も相手に発話に対する軽い認定として頻繁に使われている。こうしたあいづちの共起は言語間に共通している点も非常に興味深い。

5.4. 共起しにくい感動詞類

前述の心的操作と関係する感動詞類とは異なり、実際の動作実行に連動するかけ声類や、対聞き手的機能を中心とする挨拶語は独立性が高く、他感動詞類との共起が稀にしか見られなかった。情報処理との関与が少ないため、情報処理関係の感動詞類との共起が当然起こりにくい。ただし、「それ、よいしょ」のようなかけ声類感動詞同士の共起も考えられ、こうした感動詞の共起は情報処理プロセスの観点では説明できず、動作実行の観点からの分析が必要かもしれない。今回の調査ではこのような例が見当たらなかったが、かけ声同士の共起については今後の課題としたい。

5.5. まとめ

以上、本章では、本調査で特に共起特徴が顕著な感動詞や出現頻度の高い感動詞を取り上げて

(5) 「H化」という名づけは田窪・金水(1997)を参照。

考察を行った。その結果、「あらまあ」のように共起順が「反応→評価」という人間の情報処理プロセスと一致し、倒置することができない感動詞類もあれば、「あの」を代表とする様々な感動詞類と共起でき、情報処理の時間順に左右されない言い淀み系の感動詞も観察できた。また、「うん、ふん」の共起から、心的操作の作用以外、感動詞の共起順がその発音の利便性とも関連していることがわかった。これらの感動詞類に対し、情報処理とほとんど関与しないかけ声と挨拶語は他感動詞類との共起頻度が低く、その同類共起については動作実行の観点とコミュニケーションの観点から考える必要があると思われ、今後の課題としたい。

6. 終わりに

以上、本稿では日本語日常会話コーパスを用いて、語彙素が異なる感動詞の共起について分析・考察を試みた。「あらまあ」の共起順の不可逆などが示すように、感動詞の共起順は基本的に情報遭遇—情報処理—情報受容—情報判断、評価という自然な人間の認知プロセスに従うが、「えっ、あっ」のように同じく情報遭遇のプロセスに位置する感動詞類が共起可能であること、「肯定応答」+「否定応答」の共起も観察できること、また情報処理中の合図として言い淀み系の感動詞が自由に遊離することができるといった点からみると、感動詞の共起と人間の認知プロセスとの対応は絶対的なものとは言えない。

情報処理の視点のほか、対他的な感動詞、動作実行関与の感動詞類についてはそれぞれ別の観点での考察が必要であり、また発音の利便性も感動詞の共起順と共起頻度に影響している。今後はこれらの視点を取り入れ、「あっ、ああ」のような同音感動詞や、言い淀み系の類義感動詞の共起なども含めて、感動詞の共起についてより精密な検討と精緻な記述を課題としたい。

参考文献

- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会編、くろしお出版
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構心的操作標識「ええと」と「あの(一)」」『言語研究』108号
- 富樫純一 (2002) 「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』第七号、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 森山卓郎・張敬茹 (2002) 「動作発動の感動詞「さあ」「それ」をめぐって—一日中対象の観点も含めて—」『日本語文法』2巻2号 くろしお出版
- 森山卓郎 (2015) 「感動詞と応答 新情報との遭遇を中心に」『感動詞の言語学』ひつじ書房
- 森山卓郎 (2022) 「感動詞としての「マジ」と「ホント」」友定賢治編『感動詞研究の展開』ひつじ書房
- 姚瑶 (2021) 「「あ」系感動詞における語の認定について」『早稲田大学文学研究科紀要』66、早稲田大学大学院文学研究科
- 劉伝霞・有元光彦 (2022) 「日本語会話の二連鎖感動詞類に関する予備的考察」友定賢治編『感動詞研究の展開』ひつじ書房